

| 座談会 |

身近な地域における 学生ボランティア活動と その支援について考える

● 学生ボランティアの地域活動の現状について

赤澤 大学生のボランティアについて考える場合、ボランティアをめぐる動きだけではなく、大学生をめぐる世相のようなものと大学生の関係がさまざまに影響しているという気がします。特に、阪神・淡路大震災以降、学生が大学の外にいるな人と出会ったり、地域の活動を通じて学ぶテーマを見つれたりすることの重要性がとても認識されたと思います。

そうした学生の自主活動を支援する動きや、学校のカリキュラムやインターンシップなど、学生が地域社会とかわりをもつ機会・メニューが増えてきています。その一方で、大学の勉強や就職活動、アルバイトなどにより活動時間が制約されることも増えてきたと感じていますが、いかがでしょうか。

それでは、まずは大学生のお二人から、ボランティア活動にかかわったきっかけや具体的な活動内容、そこで感じたことなどをお聞かせください。

高橋 小平市で取り組まれている

「こだいらNPOセミナー」が、ボランティア活動と出会うきっかけでした。このセミナーは、白梅学園大学、武蔵野美術大学、嘉悦大学の3つの大学と、小平市民活動ネットワーク、こだいらボランティアセンターによる5者の共催で運営されているもので、参加している大学生の前で、NPOの方たちがプレゼンテーションを行い、学生たちは自分の興味のある活動に参加し、その後に報告会を行うというものです。

私が初めて参加した活動は、小平市にある「春望」という障害者の支援を行うNPOの訪問でした。それまでは、ボランティアに関する知識がなかったのですが、他大学の学生と一緒に参加させていただきました。実際に体験できることがボランティアの良さであり、利用されている方や職員の方々にもかかわれたため、私自身の視野が広がったことを実感しました。

座間 私は「小平・環境の会」というNPOの活動に参加をさせていただきました。この会では、地域の畑を借りて、近隣の小学校から出る給食の生ゴミを使って野菜を育てる活動をしています。私たちが行ったときには収穫祭をやっていて、地域の方たちも参加をして、育てた野菜で料理をつくって食べるという活動だったので、早めに行って料理のお手伝いをしました。

活動内容は自分が大学で専攻しているものとはまったく違



出席者



特定非営利活動法人
ユースビジョン

代表

あかざわ きよたか
赤澤 清孝 さん



国際医療福祉大学
IUHW ボランティアセンター
ボランティアコーディネーター

ぐんじ きょうこ
郡司 京子 さん

うジャンルでしたし、自分の知らない人ばかりという状態で、すごく不安でした。けれども、まったく知らない人から料理をすすめられたりするなかで、人と人とのつながりや温かさを感じて、すごく楽しかったという思いがありました。

人とつながりの大事さというものを「こだいらNPOセミナー」で学んだ気がします。

高橋 また、私たちは小平市の地域の方たちと学生ボランティアがかかわって、商店街など地域の活性化をめざす「K.ship」という活動もしています。「K.ship」は、「こだいらNPOセミナー」への参加がきっかけで、地域の方たちとのかかわりの楽しさに夢中になった有志が集まってできた活動です。できた当初は、武蔵野美術大学や嘉悦大学、白梅学園大学などの学生たち10人くらいが集まって活動をしていました。

活動としては、地域の活動等を紹介するフリーペーパーづくりに取り組みました。実際に自分たちで街を歩いてさまざまな人にインタビューすることで、多様な意見や思いが聴けて、身近なところにあたらしい発見があったり、視野が広がるきっかけになったりしました。昨年の10月には、地元の商店街のお店を借りて、地域の子どもたちを呼んで「ハロウィン・パーティ」を行いました。

座間 活動をする前には商店街になじみがなかったのですが、商店街を盛り上げたいという気持ちをもっていらっしゃる方がたくさんいて、そういう方々と協力してやっていくことがすごく楽しかったです。

自分たちだけでできることではないので、地域の人にお手伝いをお願いしたり、一緒に企画を検討したりと、いろいろやっていると時間が足りなくなってしまう。楽しいことをやりたいけど、準備にはその倍もやらなければならないことがあって、という葛藤もありました。

● 大学や地域のボランティアセンターによる支援の実際とポイント

赤澤 郡司さんは、大学ボランティアセンターのコーディネーターの立場から、学生のボランティア活動の様子や、学生たちはそこで何を感じたり、学んだりしているかということについて、どのようにご覧になっていますか。

郡司 ボランティア活動をすることで、学生たちは社会とのつながりを持ち、「自分だけのため」というところから他者に対しての目線が出てきたり、大学のなかでは体験できないようなさまざまな「学び」を得ることができると考えています。

最近では、大田原市的那須野ヶ原青年会議所と協働で、世代間交流と地域の再発見を目的とした事業を行いました。大学生と大田原市内の女子高生・男子高生のメンバーを募集し、女子グループと男子グループに分かれて、一緒に地域のために活動できることについてそれぞれアイデアを出しあいました。

男子は、地域の人たちと「大田原の魅力について話そう」というワークショップを行い、女子たちは、栃木の郷土料理の作り方を地域の人から学ぶプログラムを行いました。

これらのプログラムでは、大学生と高校生と一緒に企画をつくって、地域の人たちに呼び掛けたことに効果があったように思います。参加者の人数は多くはなかったですが、高校生からおばあさんくらいの年齢の人たちが、一緒に料理をして伝統・文化を学んで、一緒に過ごした成果は大きいと思います。

赤澤 多世代とのつながりや地域とのつながりをつくるためのきっかけとして、ボランティアがあると思いますが、長谷部さんは、学生ボランティアの支援にかかわるなかで、どのような想いで取り組まれていますか。



社会福祉法人
神戸市長田区社会福祉協議会
長田ボランティアセンター

はせべ おさむ
長谷部 治 さん



白梅学園大学
子ども学科3年

たかはし ゆみ
高橋 優美 さん



白梅学園大学
子ども学科3年

ざま あすか
座間 明日香 さん

身近な地域における学生ボランティア活動とその支援について考える



長谷部 学生と地域を結びつけるためには、双方に「学び」や「楽しみ」がないといけません。コーディネーションにあたっては、学生が大学を卒業して専門職になる際に、役立つ体験をボランティア活動でしてほしいという想いと、その専門職の世界だけでは味わえない体験もしてほしいという、両方の想いがあります。その

ため、学科別に役立つプログラムをボランティア活動としてメニュー化するとともに、それとは別に、学生が普段出会えないようなニーズをもとにしたボランティア活動との2本立てのプログラムで取り組んでいます。

最初はメニュー化されたプログラムに参加して自信がたり、目覚めたりする学生が多くいます。また、ちょっとつまづいて失敗して、頑張ったら乗り切れるくらいのところに活動の難易度を設定しています。地域の人からすると早く結果が出た方がよいわけですが、あえてそう仕掛けています。仕事というものは「失敗」をしてはいけませんし、「うまくやって当たり前」のところがりますが、大学生のボランティア活動は、試行錯誤の力をつける場ではないかと思っています。

それから、学生の参加を募る学外からの依頼に対しては、まず、「その活動が学生のどんな学びになりますか？」というのを、依頼者に対して問うことにしています。

学生が行って、学生が学ぶ何かも重要であるということを知ってほしいですし、それが分かって活動を受け入れるのと、分からずに受け入れるのでは効果が全然違うためです。

● 大学や地域のボランティア支援機関による支援の効果

赤澤 大学のなかには先輩と後輩のゆるやかなタテの関係があるものの、悩みごとを相談できる人間関係が意外につくりにくいところがあります。ボランティア活動は、そういう人と人とのつながりや関係づくりにも効果があるのではないのでしょうか。

長谷部 異質な人とつきあうことは大事だと思っています。同じ大学に通って同じ勉強をしている同級生という「同じ集団」は居心地が良いものですが、それとは異なる異年齢とか異質の人たちとのコミュニケーションが必要ですね。

郡司 大学生活は、たぶん学校とアパートとの往復だけで生活はできると思いますが、その4年間、社会と切り離され、社会と無縁な関係になってしまうことが怖いですね。

大学に通うだけだと、地域がどういふふうになり立っているのかとか、どんな想いをもっている人がいるのかとか、なかなかそこまで見えません。それが、ボランティア活動を通じて、

本業とは別に、地域のために必要だからとの想いで活動に取り組む人の姿にふれると、学生の生き方、働き方にもすごく影響を与えるだろうと思っています。私自身、そうした大人と出会ったことによって、自分の生き方とか、なりたい大人像を描くのにもすごく影響を受けたと思います。

ボランティア活動によって学生が地域と出会うなかで様々な失敗体験や成功体験を経験すると思うのですが、そういう体験を学生自身の「学び」や「成長」につなげるというときに、工夫していることや配慮していることはありますか。

長谷部 昔の大学生ボランティアは、大学のそばに全身性麻痺の障害者の方が住んでいて、24時間の介護が必要なときに、学生がローテーションで介護するという活動や、障害児を集めてキャンプに行くことなどがよくありましたが、最近の学生の傾向としては、地域の活性化や地域のお祭りを盛り上げるといった活動が、大学生ボランティアの入口として向いているのではないかと感じます。

地域にも年齢の空洞化現象が起きていて、中学生まではなんとか地域の活動に引っ張ってくる道があっても、高校生・大学生を巻き込めなくなってきていますので、大学ボランティアセンターの役割がますます重要になってきていると考えます。

長田区には創建1800年の『日本書紀』にも出ている長田神社があるのですが、その神社の参道には和菓子屋さんが多いのです。ここでは和菓子を盛り上げるという取り組みをしているのですが、そのなかに歯科衛生士をめざす学科の学生たちが、お菓子のイベントの脇で、歯磨き指導のコーナーをやっています。来年から実習に行かなければいけないけれども、不安のある学生たちが、お菓子を食べて回っている子ども相手に、大きな歯ブラシなどを使って、歯磨きの練習をやって見せることで、「私ももっと頑張らなければ」と思ったり、「意外とできた、安心した」というシーンがあって、学生にとってはそれがとても良いきっかけになっています。

赤澤 郡司さんは、学生が地域に出て行くことを応援する立場だと思いますけれども、情報を入手したり、地域の関係をつくるうえで、どんなことに配慮していますか。

郡司 私がいままで地域で出会った人のなかで、「この人はおもしろそうだ」という人や、「この人だったら、学生を安心して託せる」という人との関係性をつくったうえで、学生を送り出すことを心掛けています。学生にとっての「学び」ということを、依頼を受ける段階で意識するのは、私も同じです。

地域に密着したボランティア活動を、学生にとって「特別なこと」にするのではなくて、日常生活の延長として、社会的課題や地域の人たちの表情が見えるような活動とすることをポイントにしています。

赤澤 大学生のお二人には、ボランティア活動にかかわる前と後で、自分自身の意識や地域の見方が変わった実感はありますか。



高橋 「ハロウィン・パーティ」をきっかけに、商店街の方たちのかかわりを通して、商店街の人たちも自分たちの地域を盛り上げたいという気持ちが強いことを感じました。

座間 地域住民の方々の人間関係が希薄になりつつあるなかで、商店街を盛り上げたいという気持ちをもって方たちと協力してイベントをやっていくとすごく楽しいです。いままでは、大学までの通学路としか感じていなかった商店街の見方が変わりました。



長谷部 商店街の人たちは、商売によって自分が生活していくのも大事ですが、地域のことも考えています。“地域が良くなる”ということのなかに、“大学生が楽しんでくれる”ということも考えているのではないかと思います。

● 学生と地域をつなぐためのコーディネーターの役割

長谷部 最近、学生の活動を観察していて思うことは、地域に出して必ずしも「学び」があるわけでもなく、まったく「学び」がないわけではないということです。もちろん出たら必ず何かしらあるのですが、「学び」の効果を上げるうえでは、学生のボランティアを受け入れた地域の人たちが、どれだけ学生に声を掛けてくれたかは大きく影響しますね。「場所を貸すから、勝手にやって」というのと、学生が活動している様子を見てくれて、声を掛けてくれる、気に掛けてくれているのでは、学生の学びに大きな差が出てきます。

僕自身の感じている現代の学生たちの特徴は、自分が役立っていることを自分で認識することが苦手だと思います。「君たちのお陰で、今日はお客さんがすごく喜んでいた」とか、人から言われて初めて、役に立っていたことの自己評価ができる学生が多いですね。ところが、商店街の人たちや地域の人たちは、そうした感謝の気持ちは言葉に出さなくても、そのことはお互いに暗黙の了解として分かっていると思ってしまうふしがあるのです。

逆に言えば、学生に「もっとこうしてよ」とか、「それはだめですよ」ということも言わない傾向にあります。

赤澤 地域の側は、まだまだ学生のことを十分に理解しているとは言えません。

ボランティアをしている学生が不満に思っている理由は何かという、一つは十分な事前説明がなくて、現場に行っただけで何をしようか分からなくて困ったということです。次に

多いのは、本当に自分が役に立ったかどうか分からなかったということです。

長谷部 地域の活動では、終わりが明確ではないことが多いですね。今日の活動はどこで終わったのか分からないということです。学生のボランティアは、たまたまその日に来て、その日だけの活動をしますので、区切りがないと「今日は何をしたのか？」となってしまいます。入所施設などは、24時間体制のために、特にその傾向が強いですね。

赤澤 地域の夏祭りなどのボランティア活動では、終わる時間が遅くなることもあります。施設や地域の人たちからは、ボランティアも早く帰りたいはずだ、長い時間拘束してはいけないという思いから、「最後に振り返りをしましょう」とは言いにくいという声も聞きます。しかし、そうではなくて、短い時間でもいいから、きちんと感想を聞いたり、何かしらのフィードバックをすることがボランティアに報いることになり、その後の活動の動機付けにもつながります。

長谷部 ボランティアを受け入れるということは、受け入れ者の側に声掛けや振り返りの役割もあるということ、コーディネーターがきちんと伝えなければいけません。

郡司 大学ボランティアセンターがサポートできる態勢があれば、活動者である学生と受け入れ先の人からの終わったあとの話をすりあわせるところまでやって、学生には「ここが良かったよ」とか「ここは改善が必要だったよ」という話をします。もしその場で意見が言えなければ、日が経ってからでもいいから、学生と相手先の活動が終わるまで、しっかりフォローする必要がありますね。

赤澤 学生と地域とは、いままでほとんどつながる機会がなかったこともあって、お互いの様子を探りながら連携を進める状況にあると思います。時間をかけていけば、お互いに分かりあえることがたくさんあるのかもしれませんが、限られた時間のなかで出会っているということがありますので、それぞれに感じていることを、うまく向いあわせるといって、つなぎあわせる役割を、大学や地域のボランティアセンターが、果たすことが大切ではないでしょうか。そうすることで、それぞれの立場の違いはありますが、お互いの深い部分を知りあったり、お互いにもう一歩踏み込むように促したりすることで、それぞれの立場を尊重しつつも、遠慮せず一緒に地域をおもしろくしていくようなことがたくさん出てくるのかなという気はします。

みなさんの話から、地域での活動を通じて、学生がさまざまな人に会って視野を広げ、楽しみながら成長していくことが改めて実感できました。また、そうした学生の新鮮な視点や活力は、地域で活動する大人にとっても大きな力となります。そのため、これから大学や地域のボランティアセンターにはお互いの連携を深め、学生のボランティア活動の支援を一層進めていただきたいと思っています。